

牧田諦亮監・落合俊典編

七寺古逸經典研究叢書 第三卷

中國撰述經典（其之三）

大東出版社

The Long Hidden Scriptures
of
Nanatsu-dera, Research Series.
Volume III.

SCRIPTURES COMPOSED IN CHINA
Volume III.

Editor in Chief

MAKITA TAIRYŌ

Managing Editor

OCHIAI TOSHINORI

DAITŌ Publishing House, TOKYO
1995



南无東南方无緣莊嚴佛

南无西南方遍諸摩訶薩

南无東方日光照曜佛

南无東方一切德嚴佛

南无下方妙善住王佛

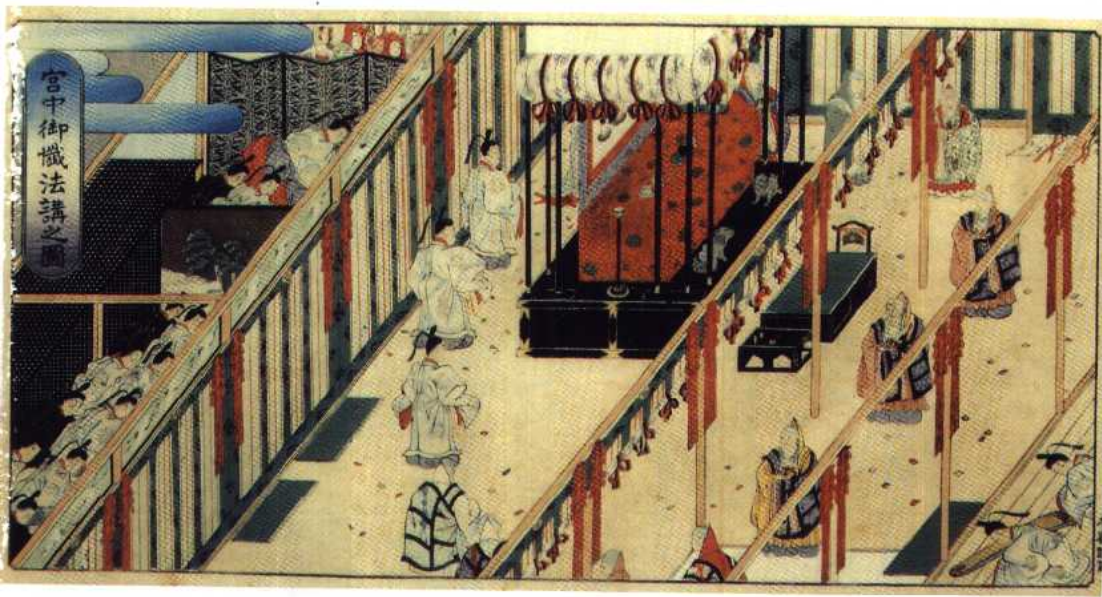
南无上方蓮華藏光佛

如是十方盡虛空界一切三寶至心歸今常
住三寶

弟子自從无始以來至於今日或盜他財寶
興田殖產或自佔持身逼迫而取或持金鐵或
假勢力高樹文棧枉押良善吞納物貨將直
為曲為此因緣身羅惡網或枉耶治或領他
財物侵吞益枯授訟益云損彼利此損此利
彼割他自饒心與心惱或竊侵租估偷度開
稅區公課輸藏隱使侵如是等罪今悉藏悔
至心歸今常住三寶

願弟子等我是瞋悔劫盜等罪所生功德生
世世得如意寶常而七称上妙衣服百味
甘露種種湯藥隨意所須應念即至一切
衆生无偷奪想一切皆能办欲知是不訖不
汝常樂慧施行急送道頭目髓腦捨如棄涕
涕泗而滿足極改罪客至心歸今常住三寶

佛名經卷第十六



宮中御懺法講之圖

監 序

牧 田 諦 亮

七寺古逸經典研究叢書第一卷（毘羅三昧經）を襲いで、ここに第三卷（佛名經）を公刊し得ることとなった。古歌に、「雲のうちに佛のみなをとなうれば、つもれる罪もやがて消えぬる」というのは、平安朝以來の佛名會に参加して、懺悔滅罪を實感した人のいつわらぬ述懐であろう。昭和三十九年三月公刊の『東方學報』京都第三十五冊（敦煌研究）に井ノ口泰淳氏が「敦煌本佛名經の諸系統」を發表された。その中で斷片的な十六卷本佛名經を整理し考察して、佛名經研究に大きな光明を與えられた。それから二十餘年、名古屋七寺でのほぼ完全な十六卷佛名經の發現は、日本佛教初期からの漢語佛典流傳について、毘羅三昧經の場合と同じように重要な示唆を與えてくれるものであることは改めて言うまでもない。竹居明男教授の發表にあるように、望月佛教大辭典、和歌森太郎、小林太市郎、鹽入良道、井ノ口泰淳諸先學の研究を基盤として、今後とくに日本中世文學史上に新たな研究分野が拓かれてゆくことであろう。

さらに中國、日本の佛教交流研究の上に、正倉院文書に天平八年（七三〇）九月二十八日にその名が見え、また鑑眞和上が將來したという十六卷佛名經が七寺一切經を経て一千二百六十年後の今日、このような形で公刊されたことは不滅の佛教精神の發露である。また眞柄・竹居・郭・三輪諸氏の論稿を得て、關係各位の不斷の努力と主編者落合俊典教授の不退轉の熱意、さらには有縁の諸賢の教示を得、平成六年度科學研究費「研究成果公開促進費」の交附を得るなどによって本書の出版が可能となったものであることを銘記して、關係研究者一同は第三回報告（清淨法行經・淨度三

昧經・大通方廣經・觀世音三昧經等）の實現に向かって努力している。今後、より一層の教示御支援を賜わらんことを祈念するものである。

（七寺古逸經典研究會會長）

W459/38 15

序

落合俊典

數十點に上る七寺古逸經典の中で最初に確認されたのは本巻に収めた十六卷本『佛名經』であった。この系統の經卷は日本に絶えて久しく、灰燼に歸したものと考えられてきたが、不思議なことに七寺本の發見を待っていたかのやうに各地に散在することが分かってきた。京都の堀川寺之内にある、平安・鎌倉時代書寫の興聖寺藏經にも存在し、またすぐ南隣に位置する妙蓮寺の松尾社一切經中にも一部の存在することが判明した。さらには名取新宮寺の一切經にも混入していることが推測されている。

七寺藏の十六卷本『佛名經』は揃いではなく、十二卷本の卷九が混入している。そのため京都興聖寺の十六卷本『佛名經』卷九を影印翻刻した。興聖寺藏經はまだ正式な報告書が出ていないので十六卷本がどれくらい残っているか不明であるが、この一切經も七寺の四、九五四卷に近い卷數を有する藏經である。現在文化廳が調査しているのでその全容の紹介もまじかであろう。

*

*

過去の歴史を振り返れば、曾て日本各地に數多くの十六卷本が存在したことは自明のことであつたのである。それほどに大きな影響を与え續けた書物であつた。この經典を軸に回轉してきた宗教的現象が百年以上に亘つて見られてきたのであるが、根本資料の不在を理由に説明しようとしなかつた怠慢を我々は反省しなければならない。敢えてか

く言うのは、敦煌本をもとにした復元作業がすでになされていたからである。敦煌文獻を中國佛教だけのテリトリで見ると、一方、奈良・平安寫經を日本佛教の枠組みだけで考える傾向が強い。しかし實際には敦煌と日本の奈良・平安佛教は、基本的に長安を同心圓とする共通の佛教文化受容者であったのである。

その點で歐米の研究者の多くは地域と時代を細分化するよりも、漢語文化圏という幅廣い視野で考察しようとしている。隋・唐佛教研究に缺かせないのは、新羅佛教はもとより奈良・平安佛教である。とりわけ中國本土から消滅した數多くの章疏が日本には残っている。數十點に上る七寺古逸經典はその一例であるが、周知のように今までも『大正新脩大藏經』や『續藏經』等に數多く收載されている。なにも文獻に限ったことではない。佛教儀禮や佛教文學などの具體例も隨所に見いだされるであらう。

ところで、七寺本・興聖寺本十六卷『佛名經』の本文の嚴密性はどれくらいであらうか。敦煌本の佛名經と比較研究したならばより具體的な數値を引き出すことができたであらうが、斷簡を含めた敦煌本の總數は庞大であり、煩雜なることを恐れて比較對照は行わなかった。その爲に明確に述べることは難しいが、全體としては相當高い嚴密性を保持しているのではなからうか。ただ難解な語句の筆寫については寫經僧の學問的レベルが現れている。七寺本の執筆僧は能手の蓮定房であるが、懺悔文を読み込んだ形跡は殆ど見つかからない。讀めないまま形を寫したものもある。しかし、日本寫經の通例として長安から傳來した佛教經典およびそれらの轉寫本には、本文と異なる語句を書き込んだり勝手に訂正したりすることはなかったので誤寫等を除けば原形態から離れていることはないと言える。

*

*

本書の研究篇には先ず本文の詳細な解題（眞柄和人）があり、次に日本における佛名會を歴史的に考察した論稿（竹居明男）が續き、その佛名會を知る手掛かりとして實際の三千佛名會を活寫した小論（三輪照海）がある。また中國

における展開では佛名懺を中心に述べた詳論 (Kuo Li-ying) を用意した。これには佛蘭西文と日本語譯文 (京戸慈光) がある。佛蘭西文を残したのは歐米の研究者への配慮である。

このようにして十六卷『佛名經』を軸に展開してきた佛名懺悔思想の概要が十分把握できるものと信じる。しかし、實のところこれらの研究は始まったばかりであり、本書の出版を契機として多方面からの新たな照射を期待したい。今まで、人はあまりにも一見無意味な佛菩薩名の羅列に辟易してきたし、また疑偽經というレッテルのために考察の手が緩められてきたのではなからうか。

(七寺古逸經典研究會代表幹事)

目次

監序

牧田諦亮

序

落合俊典

資料篇

眞柄和人 落合俊典

牧田諦亮 榎本正明

十六卷佛名經

影印・翻刻

3

佛名等索引

841

研究編

『佛說佛名經』（十六卷本）解題	眞柄和人	1013
日本における佛名會の盛行	竹居明男	1101
三千佛名經に基づく佛名會の次第	三輪照海	1173
中國ならびに日本における佛名の讀誦	（譯）Kuo Li-ying（郭麗英）	1218
	（譯）京戸慈光	
La récitation des noms de buddha en Chine et au Japon	Kuo Li-ying	1262

あとがき

英文目次

CONTENTS

Preface to the Series

By Makita Tairyo, Editor in Chief

By Ochiai Toshinori, Managing Editor

Research Materials

by Magara Kazuto, Ochiai Toshinori

Makita Tairyo, Enomoto Masaaki

The 16 volume *Fo-ming-jing*

Photographic reproduction and transcription 3

Index to Buddha names and other terms 841

Research Papers

Magara Kazuto

Summary of the *Fo-shuo-fo-ming-jing* preserved at the
Nanatsu-dera temple 1013

Takei Akio

Flourishing of the Butsumyō-e Rituals in Japan 1101

Miwa Shōkai

The Contents of the Butsumyō-e Based on the
Sanzenbutsumyōkyō 1173

Kuo Li-ying

Recitation of Buddha Names in China and Japan 1262

Afterword

Contents in English

Daitō Publishing House

資料篇

十六卷佛名經
影印・翻刻

担
當

眞柄和人

落合俊典

牧田諦亮

榎本正明

十六卷佛名經

影印・翻刻

凡 例

- 一、本影印に用いた底本は、卷一―卷八、卷十―卷十六が平安時代末期書寫の七寺（名古屋市中區大須、眞言宗智山派）所藏本である。ただ卷九の七寺本は十二卷本佛名經が紛れ込んだものであるため、京都市堀川寺之内にある臨濟宗興聖寺派本山興聖寺の同年代書寫の佛名經を影印した。
 - 一、書誌に關しては研究篇の解題を参照されたい。
 - 一、上段に影印を、下段にその翻字を配した。
 - 一、翻刻に際しては、出來得る限り原本の體裁に忠實に行うことを旨としたが、字體は概ね正字（舊漢字）を使用した。従つて古體や異體などの字も正字（舊漢字）に改めた。また訂正等は最小限に止めた。膨大な敦煌本との校勘は煩瑣になることを恐れて行わなかった。
 1. 誤寫・倒置等の訂正は翻刻文の右傍に「」を以て示した。
 2. 意味の十分にくみ取れない箇所については（ ）によつて推測した。
 3. 行取りは原本のままとし、各行の上部に通しの行數を記した。
 4. 句點、返り點等は附せず白文のままとした。
- 一、本文理解の便を考慮して佛名・經名・菩薩名・聲聞緣覺等名の索引を作成した。

佛說佛名經第一
三藏菩提流支在胡國秦太文宣公譯

佛說佛名經第一
(表題)

三藏菩提流支在胡國秦太文宣公譯